

1998-6

科学技術政策研究所
10周年記念コンファレンス

科学技術政策研究の役割と将来
2010年代の若者像

1998. 10. 8

橋爪大三郎
(東京工業大)

□1□ 自己紹介

□2□ 21世紀は、科学技術がフロンティアとなる時代

- 1) 巨大産業のR&Dにより重点が 基礎研究→製品開発→市場化：時間がかかる
- 2) 地球環境の制約：地球にやさしい→人間に厳しい→効率UP（資源節約）：技術革新
- 3) 複雑化する社会、文明の衝突、対立の激化 ⇒ 人類共通文明としての科学の役割↑

□2□ 世界共通の傾向について

- 1) 都市化・第3次産業化 教育の重要性が高まる（職業の世襲が減る）
経験が間接化する（人工環境の増大）
- 2) 情報化の全面展開 情報：人→メッセージ→人（他人との関係）
それ自体において、パブリーな性質をもっている
- 3) 消費社会の進展 すべての対象が同列な選択の対象（商品）となる～価値相対主義
脱宗教化 脱ナショナリズム 脱「科学」：科学と迷信は同値
⇒ アイデンティティの混乱と再確立：再宗教化 再ナショナリズム
- 4) 貧困と閉塞感が広まる 第三世界の若者世代の反抗 先進国への異議申し立て
先進国の若者世代の内向 先進国の価値観への懐疑

□3□ 日本の傾向について

- 1) 理工系離れ 戦前は理工系人気
戦後は経済発展の主役に
80年代以降の低成長、消費社会化 ⇒ 理工系のマイナス・イメージ
- 2) 教育システムの失敗 昭和16年体制（学区制、通達行政） 学校＝監獄
教育機関が機能しない（知育崩壊） →塾で学力をつける
∴一斉授業 →落ちこぼれ、退屈
⇒ 学習意欲の全面的な低下と、独創性の欠如
- 3) 日本株式会社 ・ジェネラリスト優位（専門化劣位）
・あるべきところに競争なし（業界の調整優位） 護送船団
・組織に対する忠誠が優位
⇒ ベンチャー企業が育たず、日本（大きな政府）は遅れをとる

科学技術政策研究所10周年記念コンファレンス 1998. 10. 8～9

テーマ：科学技術政策研究の役割と将来

Part 2 21世紀の社会展望

4. 2010年代の若者像 15:30～16:10

橋爪大三郎（東京工業大学）

21世紀という困難な時期を乗り越えるために、科学技術が大きな役割を果たすであろうというのは、確かなことである。

科学技術がそうした役割を果たすために、優秀な若者が数多く、引き続き理工系の分野に進んでくれることもまた必要である。

これは、教育の問題であるが、すべての国々でうまく行っているとは言えない。特に日本では、「理工系ばなれ」の傾向があり、科学技術を担う人材を確保しにくくなっている。

そこで、日本を例にして、高度産業社会における科学技術の問題（特に、人材の世代間再生産）について考えてみたい。

戦前から戦後にかけての日本では、理工系はむしろ人気があった。

戦争期、日本は高度国防国家の建設をめざし、理工系の大学生は徴兵が猶予された。こうした優遇措置の結果、優秀な人材が文系ではなく理工系を志望し、戦争を生き長らえて、戦後復興に取り組むことができた。

戦後、日本は経済発展を重視し、高度成長の過程を通じて、理工系人材に対する膨大な需要が生まれた。そして、理工系ブームが巻きおこり、第二のホンダやソニーをめざして、多くの若者が科学技術者をめざした。

80年代になって、変化が起こった。生産力が過剰となり、高度成長が終わって安定成長に転じた結果、消費社会、財テクの流行、バブル経済、文系人気が生じた。いっぽう研究開発が巨大化し、大学の相対的な地位が低下し、理工系の研究室は3K職場なみに忌み嫌われた。理工系学生の学力、やる気の低下が心配されるようになった。

バブル経済が終わっても、理工系の失われた魅力は、戻ってきていない。この状態が続くようだと、「科学技術創造立国」の実現は難しくなる。

欧米諸国では必ずしも、こうした傾向は観察されないようである。これは、大学や企

業など、科学技術をとりまく社会環境が異なるからであろう。

日本の高度成長は、財閥系の大企業が、通産省など政府の指導にもとづいて、計画的・集中的に投資を行なうという方式によっていた。戦後初期にみられたようなベンチャー企業が大企業の成長するケースは、例外的だった。このため、大学卒業生の就職先は大企業がほとんどで、独立志向は育たなかった。

もうひとつの問題は、文系／理工系の垣根が高く、双方の交流が少ないことである。大学入試科目の関係で、いったん理工系を志望すると、大学では文系の科目に触れる機会がわずかとなり、実験室に閉じこもりがちとなる。このため、偏った暗い人間になる、というイメージが行き渡っている。

数年前のオウム真理教の事件では、理工系の大学院生が中心的な役割を果たしていたことが注目を集めた。細分化された専門と組織のなかで自分を見失い、「本当の自分」を見つけるために、非科学的な教義を信じこむ。マスコミの報道するそういった信徒の典型的なイメージが、理工系の学生のイメージと結びつけられた。

こうしたイメージは、必ずしも根拠がないが、しかし若い人びとを理工系の進路から遠ざける結果となっている。この流れを逆転させるには、大学と企業の間をもっと開かれたものにし、理工系と文系の垣根を小さくしていくなど、産業界や教育のあり方に関わる根本的な改革が必要になる。

日本をはじめとする先進各国に共通する若者の傾向について、現状と予測をのべておこう。

近年、情報通信技術の発達がいちじるしい。大学生のあいだでは、電子メールや携帯電話がありふれたものになった。子ども時代をファミコンで過ごした世代には、電子メディア環境がごく自然なものだ。経験はますます間接化し、重要なことほど直接体験ではなく知識として与えられるようになる。電子的なプロセスは、機械とちがって肉眼で確かめることができない、ブラック・ボックスである。ブラック・ボックスには、内部メカニズムがなく、入力と出力が対応しているだけである。そこでは、考えられたことと現実に起こることとが区別できない。すなわち、仮想現実的である。

このため、少なからぬ若者は、科学と擬似科学の区別がつかなくなっていく。科学はあくまでも実証的なもの、経験的にその正しさが確かめられるべきものである。いっぽう擬似科学は、そうも考えられるかもしれないという程度の、実証を欠いたものである。しかし科学の成果を、知識として学習するだけの教育を受けると、どちらも同じように見えてしまう。明確な証拠をもとに推論を積みあげ、結論をえたわけではないからだ。

理工系の教育が普及した結果、人びとは、教科書に書いてあるから正しい、と思うようになった。しかしなぜ、教科書は正しいのか。よく考えてみると、これは、オウムの洗

脳と同じロジックである。科学技術の普及と、迷信や非科学的な妄想の普及とは、両立するのだ。

歴史の歯車を逆に回すことができない以上、情報化はこれからもますます進むであろう。それでは、2010年の若者は、どのように科学を担うことができるのか。

今後、科学技術とそれ以外の分野の境界は、ますますあいまいになる。科学技術の成果が社会全体をすっぽり包みこみ、科学技術の基本的な知識なしには、一般の人びとといえども生きていけない。そういう状況が、ますます進行する。

そこでまず大切なのは、若者に限らず一般の人びとが、科学技術についての骨格となる知識を共有すること。学校教育・社会教育を、この目的のために、再編成しなければならない。特にそういう知識を、体感できる、検証可能なかたちで理解することが大切だ。

つぎに、アカデミック・ポジションを、開かれた就職のチャンスとして社会に公開すること。産業界と大学・研究機関の敷居が低くなり、人材の交流が活発になるならば、科学技術を志す若者も多くなる。科学技術が社会的に評価される、報われる仕事になることが大切だ。

さらに、科学技術を、国際的なプロジェクトとして再組織すること。科学技術は、地球環境問題に立ち向かうための、人類社会に共通する武器となる。科学技術を推進する全地球的な枠組みが構築されれば、特に第三世界を中心に、より多くの若者がこの分野に参入すると期待できる。

□0□ 講師自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学助教授(社会学)。1996年4月より、大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授。
著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書店)、『冒険としての社会科学』(毎日新聞社)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』『橋爪大三郎の社会学講義2』(夏目書房)、『科学技術は地球を救えるか』『研究開国』(共著、富士通経営研修所)、『オウムと近代国家』(共著、南風社)、『新生日本』(共著、学習研究社)、『正義・戦争・国家論』(共著、径書房)、『こんなに困った北朝鮮』(マローグ・近刊)、『ポスト戦後の正統論』(勁草書房・近刊)

□1□ 戦略なき日本の、平成不況

1) 不況は、飛躍のチャンスである

- * 不況: 供給>需要~生産要素(土地・労働・資本)の過剰~物価の値下がり
- * 倒産・リストラ→ 生産要素の再配置→ 産業構造の高度化・合理化・効率化
- * 起業、新規参入、事業の拡大は、不況下でこそ可能になる
- * 今回の不況は、金融不況なため、利子は低いが資本が不足している(貸し渋り)
- * 「底を打った」と人びとが思えば、景気はたちまち上向くはず⇒ 強力な指導力

2) 日本人は、なぜ戦略を立てないのか 国家目標/政略/戦略/戦術

- * 戦略(参謀本部)は、兵站・補給の必要から生まれた 日本はこの経験なし
封建制の軍隊(自己補給)→ 絶対王制の軍隊(傭兵~戦略的補給)→ 召集国民軍
- * 君主は、政治家・兼・軍事指揮官。政略と軍略を統合。価値観にもとづき意思決定。
しかし日本…統帥権の独立(政府/軍部の分離)、参謀の専横(軍政/軍令の混同)
- * 戦略は、リアルな現実認識×強固な目的意識 ↔ 目標喪失×組織の自己目的化
「必勝の信念」~主観主義、精神主義 皇道派製の再改訂『統帥綱領』『統帥参考』

3) 不況を脱する政治の指導力とは

- * 財政政策…… 長期の投資指針 eg 都市改造、大学改革、通信革命 ×公共事業
金融政策…… 倒産させる企業は倒産、助ける企業は助ける 銀行責任者の処罰
行政改革…… 国会機能の強化 →官僚機構と権限の縮小 民主主義原理の確立
- * 政治的リーダーシップの確立 政治家の「職責」への敬意 政党の日常化
- * 国際協調態勢の再構築 ポスト冷戦~目標喪失の時代~原点に帰れ~国益の認識
国益=国民の利益 自国の国益の実現⇒他国の国益の尊重 国家目標の発見
- * 国家目標 ←日本という国民・国家・社会・文化を、どう自己確認し、構想するか

□2□ 21世紀の健康戦略とは何か

1) 南北ギャップの拡大 南(貧困・人口爆発・疾病)/北(高齢化・少子化)

- * 先進国の相互依存は強まり、第三世界は取り残されていく 資本移動~グローバル化
- * 先進国の高齢化 若年世代~貯蓄・負担増/高齢世代~消費・健康支出増
- * 途上国への投資が不足 ←先進国の消費が過剰(貯蓄が不足) ←高齢化
⇒国際的な緊張が高まり、アメリカ極構造が崩れて、不安定に

2) 生命科学の進展

- * 老化メカニズムの解明 ←ガン治療、エイズ治療、免疫療法
 - * 遺伝子診断の普及 →発病の予測はできるが治療法のない疾患が多数見つかる
 - * 医学の高コスト構造 設備投資+人件費+限界効用が逡減しない(末期医療)
- 3) 「老後」の消滅 →生涯現役社会の到来
- * 成人病の自己管理が進む 80歳までは通常の生活を送ることが原則に
 - * 退職後の、再雇用形態 シルバー労働市場の成立 労働力化率を上向きに
 - * 介護労働の需要/供給を、対応させるメカニズム 高齢者の参加

□3□ 不況を乗り越える健康戦略

1) 沖縄ヒーリング・アイランド構想

- * 沖縄は、日本一の長寿県 ←食文化(高蛋白・低塩分・緑黄野菜)&温暖な気候
沖縄全体をフリーポートにして物価を下げる →日本中の高齢者が集う癒しの島に
- * 東京圏・関西圏の不動産を処分して、沖縄に永住 気候・医療・日本語
<マンション~ホスピタル~ホスピス>を兼ね、若い人びとと住む街中の集合住宅
- * 50万人の高齢者が、400万円を支出すれば、年間2兆円のビジネスチャンスに
- * フィリピンに援助で看護学校を建て、卒業後2年間沖縄で勤務。あとは世界に転職。
フィリピンは英語国。看護学校で国際免許が取れること。沖縄の医療免許を国際化。
- * 北海道のスキー場にマンションを建て、高齢者は夏、避暑に。冬はスキー客に貸す。
避暑の間、沖縄のマンションは観光客に貸す。(2ヶ所に建ててもむしろペイする)
- * ついでに台湾からのビザなし渡航で、蓬萊経済圏構想が実現できればなおよい。

2) 都市改造で、高齢化社会を乗り切ろう

- * 日本の新築住宅着工件数は、人口当たりアメリカの2倍、欧州の数倍で多すぎる
→ 50-100年もつ集合住宅を建てれば、2倍の広さの家に住める →消費が伸びる
- * 高齢化で、住宅の新規需要はゼロ →不動産価格下落、都市のスラム化、郊外の荒廃
- * 都市計画の線引きを明確にし、私権を制限。集合住宅へ建て替えか、緑化を推進。
不動産所有権は証券化し、流通させる。人びとは原則、集合住宅を住み替えていく。
- * 当面は住宅投資で有効需要が喚起される。長期的には投資節減で若者の負担が減る。

3) 電脳ハウス革命

- * 高齢化は先進国の宿命。第三世界も順次高齢化 →日本は最初で最大のテストケース
日本が高齢化社会を乗り切るシステム・産業を開発すれば、日本の戦略的切り札に
- * 電脳ハウス: 健康、食事、家計、税、通信、教育、育児、介護、医療を総合管理
日常言語による対話型の、統合コンピュータネット(コンピュータの中に住む)
- * 電脳ハウスは、高齢者の生活標準装備になる 家事ロボット 介護ロボット
- * 電脳ハウス実現には、①住宅の大きさが揃っている、②配線や保守が容易、③スペースがある、ことが必要だが、都市再開発で集合住宅に立て替えればちょうどよい。

□0□ 講師自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学助教授(社会学)。1996年4月より、大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授。
著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書店)、『冒険としての社会科学』(毎日新聞社)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』『橋爪大三郎の社会学講義2』(夏目書房)、『科学技術は地球を救えるか』『研究開国』(共著、富士通経営研修所)、『オウムと近代国家』(共著、南風社)、『新生日本』(共著、学習研究社)、『正義・戦争・国家論』(共著、径書房)、『選択・責任・連帯の教育改革』(共著・岩波ブックレット)、『ポスト戦後の正統論』(勁草書房・近刊)、『こんなに困った北朝鮮』(メタログ・近刊)

□1□ 教育の、どこがどう病んでいるのか

- 1) 日本の教育システムには、誰も満足していない → それなのに、変わらない
 - * 親は不満 ・ 学力がつかない ・ 競争が厳しい ・ 教師が頼りない ・ いじめが多い
⇒そこで、塾や予備校に入れる、私学人気 ・ 学校教育に対する不信
 - * 教師も不満 ・ 親は自分勝手 ・ 生徒は暴れる ・ 待遇が悪い ・ 職場の人間関係
 - * 生徒も不満 ・ 授業が分からない、つまらない ・ 教師が勝手 ・ 受験がきつい
 - * 社会も不満 ・ 効率が悪い ・ 現実社会に役立つしない ・ 研究のレベルが低い
- 2) 若者は、日本の教育を受けると元気がなくなる
 - * 大学に入ってから、「勉強か嫌い」「自分は何をしたらいい」と悩む若者が多い
⇒とにかく大学に入れ、大学に入れば何とかかなる、ともの考えずに来た若者が多い
 - * 知識への興味を失い、人生を生きる積極性を失い、他人任せで責任が欠如している
 - * 無規範(アミー)が深く進行し、社会性・公共性を理解しない世代が再生産されている
- 3) 教師集団は、教育力の源泉である「連帯」を見失っている
 - * 教育委員会の任用システム 校長以下、烏合の衆～責任を取らない官僚の集まり
 - * 何をいつ、どのように教えるか、現場の権限なし 教育者としての人格を喪失
 - * クラス一斉授業の害悪(落ちこぼれ/学力低下) 生徒の個性を認めるのは無理
 - * 手を抜いても待遇は同じ → だらけ教師が教師集団全体のムードを支配してしまう

□2□ 教育を変えれば、人間が変わる

- 1) 小学校・中学校(人間基礎教育)を変える 親の選択・責任/校長の説明責任
 - * 学区制の廃止～親と生徒の、学校選択権 学校間競争、教師集団の説明責任
 - * 校長に権限を集中 人事権、予算権、教務権 教師集団に対するリーダーシップ
 - * 学校理事会 親と地域の代表が、校長を監督する 教育効果を測る外部基準
学校理事会は、地域社会によって選挙される(認定投票)

- * 校長・教師は、プロとして自立する 校長と契約ベースで、学校を渡り歩く
- 2) 高校(社会の基本教育)を変える 生徒の自己選択・学習責任 高検の導入
 - * 高校入試の廃止 書類審査で十分 学校は個人ごとの教育メニューを提供
 - * 高検の導入(SAT型) 高校卒業資格を、高検に改める 基本教科の絶対評価
⇒生徒の目標ができる～高校の蘇生 それ以外の多様なコースを開設～高校の自由
 - * 大学&社会と直結した生徒教育 社会性・公共性・倫理性を身につける
- 3) 大学(専門教育・学術研究)を変える 自由・競争・公開の原則
 - * 大学入試の廃止 キックアウト制～学生定員の廃止 大学が卒業基準を設定
 - * 学費の学生自己負担を 親の負担軽減(9兆円) 世代間、階層間の公平
⇒学生のコスト意識を目覚めさせる 勉強に対する自覚・意欲が最優先
 - * 奨学金 銀行が市中金利により、学生個人に学費・学資を貸し出す 国の保証
 - * 学内奨学金(傾斜配分) 成績に応じて、学費を還元 混雑現象が起きて平気
 - * 単位互換～学生の移動の自由 教員の任期制・公募制 研究開国

□3□ 教育を変えれば、政治が変わる

- 1) 政治～人びとの価値&意思決定の集積 人びとが独立に意思決定しないことには始まらない
 - * 個人主義教育、個性重視教育は、民主主義の政治文化の基礎 ←キリスト教
キリスト教の文化伝統のない日本は、教育を通じてこの文化を培う必要がある
- 2) 選択・責任・連帯 教育のキーワードであると同時に、政治のキーワード
 - * 選択(自己決定)の前提は、明確な価値観・正確な情報 公共性・知る権利
 - * 市民の再定義 「左翼のシンパ」(朝日新聞の市民) → 「民主主義の主体」
- 3) 教育改革のやり方は正しいか
 - * 中央教育審議会 審議会は、責任なし(選挙なし～正統性なし) 官僚主導
 - * 国会の弱体化 → 自民党長期政権 → 官僚依存(政治家に専門知識なし) → 隠れ蓑 = 審議会
 - * 教育改革を、文部省・中教審の体制から、親・生徒(市民)主導に奪い返すことが、教育改革の出発点でなければならない 教育改革～政治改革

□4□ 教育を変えれば、社会が変わる

- 1) 教育改革は、他の制度改革の前提である
 - * 教育は、世代の再生産を通じて、社会構造(制度)を再生産する
⇒教育改革なしに、制度改革なし(特に日本では、制度それ自体が自己目的となる)
 - * 教育改革は、制度改革を継続する主体を生み出す 改革の原動力
- 2) 教育は、「日本」というイデオロギーの根幹をなす
 - * 日本社会には、宗教なし 近代の制度を移入する際、教育によって国民を洗脳
⇒日本の集団主義的文化は、実は近代に急速に適応したための代償である
 - * 近代化を完成させるためには、教育を個人に合わせ人生に合わせて、作り直すべき
⇒文化を大事に、人間を大事に、知識を大事に、正義を大事に、真理を大事に
 - * 一人ひとりが充実して生きる社会こそ、日本の21世紀の目的である

少年たちはなぜ“キレル”のか



□0□ 講師自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学助教授(社会学)。1996年4月より、大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授。
 著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書店)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』『橋爪大三郎の社会学講義2』(夏目書房)、『科学技術は地球を救えるか』『研究開国』(共著、富士通経営研修所)、『近代国家とオウム』(共著、南風社)、『新生日本』(共著、学習研究社)、『正義・戦争・国家論』(共著、径書房)、『こんなに困った北朝鮮』(マローグ・近刊)ほか

□1□ 神戸小学生殺傷事件(酒鬼薔薇聖斗)の衝撃

- 少年Aは、ふつうの少年か、それとも精神異常者か 行動=環境×内因
 - 野田正彰氏～環境を重視 祖母の死、透明なボク、義務教育への復讐、レイ型犯罪
 - 小田晋氏～内因を重視 快楽殺人=異常者、稀だが一定割合で発生、動機=性欲
- 『文藝春秋』が、少年Aの供述調書を公表
 - 殺すこと自体が目的 冷静に観察(←宮崎勤:多重人格?)
 - 幻聴(淳君の頭がしゃべった)～過性? パモイドオキ神 操られている意識
- 少年Aを医療少年院に送致したのは、適当か? (少年法は必要か)
 - 少年Aは医学的治療が必要→送致は適当 Cf. 羽村高事件:犯人は現在社会復帰
 - 少年A自身は、稀な異常者。だが、多くの少年が彼に共感できると感じたのはなぜ?

□2□ 黒磯北中女教師刺殺事件(ナイフ少年)の衝撃

- ふつうの少年がナイフを持ち歩き、ささいな原因で衝動的に教師や同級生を刺す
 - ナイフ、エアガンをかなりの比率の中学生が所持
 - 5～6年前から、目立たない、弱いタイプの少年が「護身用」に所持するのが流行
- 少年はなぜ“キレた”のか?
 - 授業に遅刻したのを教師に廊下で5分ほど注意された→脅かしてやろうとナイフを出した→教師はナイフを見てもひるまなかった→カッとになってめった刺した
 - 自分を抑えることができない ナイフを使ったことがない 急所を外せない

□3□ ふつうの少女少女たちが、なぜ“キレル”のか?

- 学校拘禁症候群:嫌な場所に閉じ込められたための、異常な反応のかずかず
 - 学校にいる理由がわからない(勉学動機の喪失) 皆が行くから行くだけの場所
 - ×教師の管理 ×親の説教 教育が普及したので、努力のわりに報われない
 - 学校内ストレス 学校にいてだけで、自我が抑圧され、心理的に不安定に
 - 保健室登校 →登校拒否(不登校) →いじめ →ナイフ少年 ……

- 生理的反応によってしか、自分と外界との関係をとらえられない少年少女の急増
 - ムカつく(生理絶対主義)、ジコチュー(自己中心主義)、キレル(統制がなくなる)
 - 自己調整能力、コミュニケーション能力の欠如 「躰け」(幼児家庭教育)の失敗 小学校低学年から、私語、ふらつき、多動、注意散漫などの現象が顕著に
- 「ふつう」の(=自己表現の確立しない)の少年少女が、いちばん危険で怖い
 - 不良・非行(→補導)→校内暴力(→管理強化)→いじめ(→ソフト管理)→キレル 昔は、問題行動を起こす者は見当がついたが、最近では予測がつかなくなった
 - 自己表現が苦手な他者に認められず、自信がない→自尊心を傷つけられると急変する

□4□ 親たち、学校、社会はどうすればよい?

- 無連帯(アノミー)が、学校をめぐる問題の根本である 無連帯→規範の解体
 - Cf. 小室直樹 1979 『危機の構造』ダイヤモンド社 →中公文庫
 - 教師の無連帯 校長vs日教組 教室は治外法権 超過勤務・3K職場 教師の社会的地位・威信は急降下→校則(統制のための恣意的な規則)が膨張
 - 生徒の無連帯 成績は個人ごと(個人救済)/学校は擬似共同体 ~矛盾 いじめ:擬似共同体が個人を攻撃する“祝祭” 個性より共同体帰属が優先
 - 地域社会の無連帯 家庭が学校の価値に従属(勉強しなさい、先生躰けて下さい) 子供文化(ガキ大将)の消滅 近隣集団の解体 家族～O私的利害×公共性
- 教育改革:連帯の回復→少年少女たちが大人に成長するための、健全な環境を
 - 生徒と教師との不幸な出会い ⇨ 学区制廃止、校長に人事権・経営権を! 校長が教師を任用→校長と教師は運命共同体→教育効果を追求するプロ集団に変身
 - 高校入試を廃止(中高一貫化)して、高校卒業資格試験(=大検)を導入すべき! 内申書廃止(教師は生徒の内面に踏み込んではいならない) 成績の外部規準を導入すれば、生徒と教師は連帯できる
- 家庭教育の再建:自己責任原則を確立しよう
 - 「自分で選択したことには、責任を負う」ことを、教育(人格形成)の基本に
 - 大学学費は、親が払わず本人が負担する 奨学金(教育ローン)を学生本人が返済 学生が大学の経費を全額支払うことにすれば、大学入試は全廃できる
- 社会に貢献し、公共のために働くことの誇りを育てよう
 - 自由と規則は両立する(規則～義務なしに、自由～権利はない)ことを学ぶ
 - 例)あるインターナショナルスクールの校則は、3つしかない
 - 1) 私は、ほかの生徒が勉強するのを邪魔しません ×私は勉強します
 - 2) 私は、ほかの生徒を行為や言葉で傷つけません
 - 3) ……
 - 自分の喜びのために文化を学び、自分を知るために歴史を学ぶ ×知識 Cf. 加藤典洋 1997 『敗戦後論』:日本の国民(ネーション)=歴史の主体を作り出そう
 - 文化の再発見 高度成長とバブル時代は終わり 少年少女は大人世界の鏡 自分を語る言葉を持つこと →他との比較でない、絶対の規準をもつこと 言葉によって自分をコントロールし、現実社会を構築すること

□0□ 講師自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学助教授（社会学）。1996年4月より、大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション（全3巻）』（以上、勁草書房）、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』（以上、講談社）、『崔健』『性愛論』（以上、岩波書店）、『民主主義は最高の政治制度である』（現代書館）、『冒険としての社会科学』（毎日新聞社）、『自分を活かす思想／社会を生きる思想』（共著、径書房）、『小室直樹の学問と思想』（共著、弓立社）、『大問題！』（幻冬舎）、『橋爪大三郎の社会学講義』『橋爪大三郎の社会学講義2』（夏目書房）、『ジ・ナム思想講座 正義・戦争・国家論』（共著、径書房）、『新生日本』（共著、学習研究社）、『科学技術は地球を救えるか』『研究開国』（共著、富士通経営研修所）、『近代国家とオウム』（共著、南風社）、『こんなに困った北朝鮮』（メログ・近刊）ほか

□1□ 社会学は、どういう学問か？

1) 社会学sociology は、こぼれ球を拾う何でも屋。社会科学のゲリラ部隊である。

- 社会学は、経済学でない／政治学でない／法学でない／人類学でない／心理学でない
- 経済学・政治学・法学はある制度を前提 人類学は異文化、心理学は人間を研究
- 社会学はいっさい前提を置かないで、われわれの社会（を含むすべての社会）を研究

2) 社会学者は最近、マスコミなどに出番が多い →ほかの学問がコケたせい

- 経済学…経済予測が当たらなくなった 政治学・法学…改革で制度が変わった
- 人類学…「未開社会」が開発されてしまった 心理学…制度を論ずるのは無理
- 社会学は特定の方法がない＝現象に合わせて方法を考える テキサスヒット狙い

3) 社会学はどういう学問だったか

- イデオロギーと関係なく現実を見つめる Cf. レーニン「社会学はブルジョア」の学問
- 「理論」構築の失敗 パーツの構造＝機能分析 structural-functional analysis
- ⇒ミニ・バグイム乱立 現象学的社会学／ソリッド・インタラクション / エノムドロジ / … : 価値相対主義
- 社会学とは、社会学者がのべたこと?! 社会学の個人プレイ化

□2□ 「橋爪大三郎の社会学」へようこそ

1) 第一命題：社会（科）学は、冒険である

- 社会科学の特徴……研究の主体（学者）が、研究の対象（社会）のなかにいる。
- 身近な集団を突き放し、冷静に観察 自分が社会に作られたことを意識し、脱却
- 社会科学は、固定観念・既得権との戦い（＝自己破壊の試み）である 勇気が必要
- 人びとが社会をみる通りに社会をみていたのでは、「科学」にならない

2) 第二命題：社会（科）学は、社会をつくる

- 社会は、制度（人びとの安定した社会関係）でできている。制度は、エートス（人びとの行動様式）によって支えられている。
- 近代社会は、近代的な制度（市場、民主主義、近代家族、科学、……）でできている。

近代的な制度は、近代的なエートス（行動様式）によって支えられている。

- エートスがどのように制度を支えているか理解すれば、エートスは強化される。
- 社会（科）学は、近代的なエートスを再生産し、近代的な制度を再構築する。
- 3) 第三命題：社会（科）学がよくなれば、社会がよくなる
- 日本社会の近代的な制度は、近代的なエートスによって支えられているとは言えない。
- この事実（制度／エートスのギャップ）を理解すれば、制度に即してエートスを変革しようとするエネルギーが生れる。社会（科）学とは、このエネルギーである。

□3□ 日本人はなぜ、自分に自信がもてないのか ——日本を社会学する・その1

1) 憲法～「自由な人間が自分を律する法律」のはずなのに、憲法を自分で作らなかった。

- 日本国憲法の正統性は、旧憲法（&天皇）にある but その中身は旧憲法を否定
- 日本の近代的制度は、日本国憲法によってではなく、日本国憲法を作った力（アメリカ）によって裏付けられている。 →日本国憲法に、手を触れることはタブー。
- 民主主義（自分を律する規則を自分で制定）、法の支配（規則への忠誠）が薄弱

2) 歴史～「大日本帝国」の行為／「日本国」の行為が切断されている～戦争責任が曖昧

- 主権者である「日本国の人民」が、自分の物語を持ってない ∴歴史の喪失
- 過去を忘却し、過去から教訓を学ぶことができない→現在に埋没→アノミー

3) 教育～ 相対評価（他人との比較）の絶対化→学校的価値（周囲との同調）の全面化

- 「何が教育されるか」に関する徹底した無関心（アノミー） →価値相対主義
- 日本の学校教育を受ければ受けるほど、自分に否定的なイメージしか持てなくなる
- いまの教育の崩壊は、「学校不適応」でなく「学校を原因とする拘禁性症候群」

□4□ 日本人はなぜ、人間として尊敬されないのか ——日本を社会学する・その2

1) 経済～ 近代の市場経済は、自由（自己決定）とその代価（責任）でできている

- 日本の経済は、業績原理よりも平等原理が優先 例：累進所得税、懲罰的相続税
- 企業＝共同体主義（チーム重視）が一般的に 業績は、所属する集団への貢献
- 個々人の顔が見えない 会社をやめればただの人 日本は資本主義経済か？

2) 文化～ 人びとがこうあるべきと思っている生活・行動のパターン：日本では二の次

- 価値 周囲に承認されない価値は、価値でない（神・原理の欠如） 価値は常に変容
- 漢字（抽象概念←中国文化）とひらがな（身体・感性）との相剋 +カタカナ
- 日本の文化は、実用・感性と分化できない 抽象性・体系性・原理性が不得手
- 日本人は、世界中の文化がこうしたものだと思っている →自分の文化を説明できず
- 自分の文化に対する自覚と誇りが足りない

3) 外交～ 国益（日本国の利害）に忠実に行動し、他国の国益を尊重

- 日米安保ガイドライン＝中国との戦争計画 アメリカが持てと言ったから持った
- いっぽう、日本は対米戦争計画をもっていない（異常！） 親米／反米の幼児性
- 北米課／アジア課のセクソナリズム 日本では、相手を知ること＝相手の肩を持つこと
- but アメリカでも韓国でも中国でも、知日派が「親日」のレッテルを貼られたら終わり
- 鎖国（不快な他者には目をつぶる）→開国（列強との摩擦）→戦争（蒋介石は相手にせず、鬼畜米英）→敗戦（対米依存） 異質な他者と共にいることができない

少年たちはなぜ“キレル”のか



□0□ 講師自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学助教授(社会学)。1996年4月より、大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(講談社)、『崔健』『性愛論』(岩波書店)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』『橋爪大三郎の社会学講義2』(夏目書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』『ナニカ思想講座 正義・戦争・国家論』(共著、径書房)、『近代国家とオウム』(共著、南風社)、『科学技術は地球を救えるか』『研究開国』(共編著、富士通経営研修所)、『新生日本』(共著、学習研究社)、『こんなに困った北朝鮮』(マローグ・近刊)ほか

□1□ 神戸小学生殺傷事件(酒鬼薔薇聖斗)の衝撃

- 1) 少年Aは、ふつうの少年か、それとも精神異常者か 行動=環境×内因
・野田正彰氏~環境を重視 祖母の死、透明なボク、義務教育への復讐、17歳型犯罪
・小田晋氏~内因を重視 快楽殺人=異常者、稀だが一定割合で発生、動機=性欲
2) 『文藝春秋』が、少年Aの供述調書を公表
・殺すこと自体が目的 冷静に観察(←宮崎勤:多重人格?)
・幻聴(淳君の頭がしゃべった)~一過性? バモイドオキ神 操られている意識
3) 少年Aを医療少年院に送致したのは、適当か? (少年法は必要か)
・少年Aは医学的治療が必要→送致は適当 Cf. 九州高事件:犯人は現在社会復帰
・少年A自身は、稀な異常者。だが、多くの少年が彼に共感できると感じたのはなぜ?

□2□ 黒磯北中女教師刺殺事件(ナイフ少年)の衝撃

- 1) ふつうの少年がナイフを持ち歩き、ささいな原因で衝動的に教師や同級生を刺す
・ナイフ、エアガンをかなりの比率の中学生が所持
・5~6年前から、目立たない、弱いタイプの少年が「護身用」に所持するのが流行
2) 少年はなぜ“キレた”のか?
・授業に遅刻したのを教師に廊下で5分ほど注意された→脅かしてやろうとナイフを出した→教師はナイフを見てもひるまなかつた→カッとになってめった刺した
・自分を抑えることができない ナイフを使ったことがない 急所を外せない

□3□ ふつうの少年少女たちが、なぜ“キレル”のか?

- 1) 学校拘禁症候群:嫌な場所に閉じ込められたための、異常な反応のかずかず
・学校にいる理由がわからない(勉学動機の喪失) 皆が行くから行くだけの場所
×教師の管理 ×親の説教 教育が普及したので、努力のわりに報われない
・学校内ストレス 学校にだけで、自我が抑圧され、心理的に不安定に
→保健室登校 →登校拒否(不登校) →いじめ →ナイフ少年 ……
2) 生理的反応によってしか、自分と外界との関係をとらえられない少年少女の急増

- ・ムカつく(生理絶対主義)、ジコチュー(自己中心主義)、キレル(統制がなくなる)
・自己調整能力、コミュニケーション能力の欠如 「躰け」(幼児家庭教育)の失敗
小学校低学年から、私語、ふらつき、多動、注意散漫などの現象が顕著に
3) 「ふつう」の(=自己表現の確立しない)の少年少女が、いちばん危険で怖い
・不良・非行(→補導)→校内暴力(→管理強化)→いじめ(→ソフト管理)→キレル
昔は、問題行動を起こす者は見当がついたが、最近では予測がつかなくなった
・自己表現が苦手で他者に認められず、自信がない→自尊心を傷つけられると急変する

□4□ 親たち、学校、社会はどうすればよい?

- 1) 無連帯(アノミー)が、学校をめぐる問題の根本である 無連帯→規範の解体
Cf. 小室直樹 1979 『危機の構造』ダイヤモンド社 →中公文庫
・教師の無連帯 校長vs日教組 教室は治外法権 超過勤務・3K職場
教師の社会的地位・威信は急降下→校則(統制のための恣意的な規則)が膨張
・生徒の無連帯 成績は個人ごと(個人救済)/学校は擬似共同体 ~矛盾
いじめ:擬似共同体が個人を攻撃する“祝祭” 個性より共同体帰属が優先
・地域社会の無連帯 家庭が学校の価値に従属(勉強しなさい、先生躰けて下さい)
子供文化(ガキ大将)の消滅 近隣集団の解体 家族~○私利利害×公共性
2) 教育改革:連帯の回復→少年少女たちが大人に成長するための、健全な環境を
・生徒と教師との不幸な出会い ⇨ 学区制廃止、校長に人事権・経営権を!
校長が教師を任用→校長と教師は運命共同体→教育効果を追求するプロ集団に変身
・高校入試を廃止(中高一貫化)して、高校卒業資格試験(≒大検)を導入すべき!
内申書廃止(教師は生徒の内面に踏み込んではいならない)
成績の外部規準を導入すれば、生徒と教師は連帯できる
3) 家庭教育の再建:自己責任原則を確立しよう
・「自分で選択したことには、責任を負う」ことを、教育(人格形成)の基本に
・大学学費は、親が払わず本人が負担する 奨学金(教育ローン)を学生本人が返済
学生が大学の経費を全額支払うことにすれば、大学入試は全廃できる
4) 社会に貢献し、公共のために働くことの誇りを育てよう
・自由と規則は両立する(規則~義務なしに、自由~権利はない)ことを学ぶ
例)あるインターナショナルスクールの校則は、3つしかない
1) Respect the rights and property of others. ×学校の規則を守ります
2) Never keep someone else from learning. ×私は勉強します
3) Never say or write anything to hurt someone. ×思いやりの心を持ちます
・自分の喜びのために文化を学び、自分を知るために歴史を学ぶ ×知識
Cf. 加藤典洋 1997 『敗戦後論』:日本の国民(ネーション)=歴史の主体を作り出そう
・文化の再発見 高度成長とバブル時代は終わり 少年少女は大人世界の鏡
自分を語る言葉を持つこと →他との比較でない、絶対の規準をもつこと
言葉によって自分をコントロールし、現実社会を構築すること

ご参考までに…… ホームページ <http://www.valdes.titech.ac.jp/~hashizm/>

Eメール hashizm@valdes.titech.ac.jp

少年たちはなぜ“キレル”のか

(東工大)



□0□ 講師自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学助教授（社会学）。1996年4月より、大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授。

著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション（全3巻）』（勁草書房）、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』（講談社）、『崔健』『性愛論』（岩波書店）、『民主主義は最高の政治制度である』（現代書館）、『大問題！』（幻冬舎）、『橋爪大三郎の社会学講義』『橋爪大三郎の社会学講義2』（夏目書房）、『小室直樹の学問と思想』（共著、弓立社）、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』『フーコー思想講座 正義・戦争・国家論』（共著、径書房）、『近代国家とオウム』（共著、南風社）、『科学技術は地球を救えるか』『研究開国』（共編著、富士通経営研修所）、『新生日本』（共著、学習研究社）、『こんなに困った北朝鮮』（マロウ・近刊）ほか

□1□ 神戸小学生殺傷事件（酒鬼薔薇聖斗）の衝撃

- 1) 少年Aは、ふつうの少年か、それとも精神異常者か 行動=環境×内因
・野田正彰氏~環境を重視 祖母の死、透明なボク、義務教育への復讐、メンタ型犯罪
・小田晋氏~内因を重視 快楽殺人=異常者、稀だが一定割合で発生、動機=性欲
2) 『文藝春秋』が、少年Aの供述調書を公表
・殺すこと自体が目的 冷静に観察(←→宮崎勤：多重人格?)
・幻聴(淳君の頭がしゃべった)~一過性? バモイドオキ神 操られている意識
3) 少年Aを医療少年院に送致したのは、適当か? (少年法は必要か)
・少年Aは医学的治療が必要→送致は適当 Cf. 札幌高事件：犯人は現在社会復帰
・少年A自身は、稀な異常者。だが、多くの少年が彼に共感できると感じたのはなぜ?

□2□ 黒磯北中女教師刺殺事件（ナイフ少年）の衝撃

- 1) ふつうの少年がナイフを持ち歩き、ささいな原因で衝動的に教師や同級生を刺す
・ナイフ、エアガンをかなりの比率の中学生が所持
・5~6年前から、目立たない、弱いタイプの少年が「護身用」に所持するのが流行
2) 少年はなぜ“キレた”のか?
・授業に遅刻したのを教師に廊下で5分ほど注意された→脅かしてやろうとナイフを出した→教師はナイフを見てもひるまなかった→カットになってめった刺した
・自分を抑えることができない ナイフを使ったことがない 急所を外せない

□3□ ふつうの少年少女たちが、なぜ“キレル”のか?

- 1) 学校拘禁症候群：嫌な場所に閉じ込められたための、異常な反応のかずかず
・学校にいる理由がわからない(勉学動機の喪失) 皆が行くから行くだけの場所
×教師の管理 ×親の説教 教育が普及したので、努力のわりに報われない
・学校内ストレス 学校にいてだけで、自我が抑圧され、心理的に不安定に
→保健室登校 →登校拒否(不登校) →いじめ →ナイフ少年 ……
2) 生理的反応によってしか、自分と外界との関係をとらえられない少年少女の急増

- ・ムカつく(生理絶対主義)、ジコチュー(自己中心主義)、キレル(統制がなくなる)
・自己調整能力、コミュニケーション能力の欠如 「躰け」(幼児家庭教育)の失敗
小学校低学年から、私語、ふらつき、多動、注意散漫などの現象が顕著に
3) 「ふつう」の(=自己表現の確立しない)の少年少女が、いちばん危険で怖い
・不良・非行(→補導)→校内暴力(→管理強化)→いじめ(→ソフト管理)→キレル
昔は、問題行動を起こす者は見当がついたが、最近は予測がつかなくなった
・自己表現が苦手な他者に認められず、自信がない→自尊心を傷つけられると急変する

□4□ 親たち、学校、社会はどうすればよい?

- 1) 無連帯(アノミー)が、学校をめぐる問題の根本である 無連帯→規範の解体
Cf. 小室直樹 1979 『危機の構造』ダイヤモンド社 →中公文庫
・教師の無連帯 校長vs日教組 教室は治外法権 超過勤務・3K職場
教師の社会的地位・威信は急降下→校則(統制のための恣意的な規則)が膨張
・生徒の無連帯 成績は個人ごと(個人救済)/学校は擬似共同体 ~矛盾
いじめ：擬似共同体が個人を攻撃する“祝祭” 個性より共同体帰属が優先
・地域社会の無連帯 家庭が学校の価値に従属(勉強しなさい、先生躰けて下さい)
子供文化(ガキ大将)の消滅 近隣集団の解体 家族~○私利利害×公共性
2) 教育改革：連帯の回復→少年少女たちが大人に成長するための、健全な環境を
・生徒と教師との不幸な出会い ⇨ 学区制廃止、校長に人事権・経営権を！
校長が教師を任用→校長と教師は運命共同体→教育効果を追求するプロ集団に変身
・高校入試を廃止(中高一貫化)して、高校卒業資格試験(=大検)を導入すべき！
内申書廃止(教師は生徒の内面に踏み込んでほしくない)
成績の外部規準を導入すれば、生徒と教師は連帯できる
3) 家庭教育の再建：自己責任原則を確立しよう
・「自分で選択したことには、責任を負う」ことを、教育(人格形成)の基本に
・大学学費は、親が払わず本人が負担する 奨学金(教育ローン)を学生本人が返済
学生が大学の経費を全額支払うことにすれば、大学入試は全廃できる
4) 社会に貢献し、公共のために働くことの誇りを育てよう
・自由と規則は両立する(規則~義務なしに、自由~権利はない)ことを学ぶ
例)あるインターナショナルスクールの校則は、3つしかない
1) Respect the rights and property of others. ×学校の規則を守ります
2) Never keep someone else from learning. ×私は勉強します
3) Never say or write anything to hurt someone. ×思いやりの心を持ちます
・自分の喜びのために文化を学び、自分を知るために歴史を学ぶ ×知識
Cf. 加藤典洋 1997 『敗戦後論』：日本の国民(ネーション)=歴史の主体を作り出そう
・文化の再発見 高度成長とバブル時代は終わり 少年少女は大人世界の鏡
自分を語る言葉を持つこと →他との比較でない、絶対の規準をもつこと
言葉によって自分をコントロールし、現実社会を構築すること

□0□ 講師紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学助教授(社会学)。1996年4月より、大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授。
著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(講談社)、『崔健』『性愛論』(岩波書店)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』『橋爪大三郎の社会学講義2』(夏目書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』『J-マニ思想講座 正義・戦争・国家論』(共著、径書房)、『近代国家とオウム』(共著、南風社)、『科学技術は地球を救えるか』『研究開国』(共編著、富士通経営研修所)、『新生日本』(共著、学習研究社)、『こんなに困った北朝鮮』(タロウ・近刊)ほか

□1□ 教育改革はどのくらい大切か

- 1) 六大改革: 橋本政権では、教育改革は、一連の制度改革の「おまけ」の扱い
* 教育改革はおまけでない 制度改革でなく、国民のエートス(行動様式)の改革だ
* 金融破綻、日本システムの行き詰まり……は、日本流の組織運営の病理が噴出したもの
- 2) 教育は新時代へ 皇民教育(維新~1945)→戦後教育(敗戦~バブル)→第三の時期
* 制度⇒エートス(行動様式)は、相互形成的(ニワトリと卵)
望ましいエートスの形成を促進する制度を構築する、教育改革は可能である
* 依存(集団への適応)→選択 無責任(決定の回避)→責任 相互不信→連帯

□2□ いま必要な教育改革はなにか

- 1) 中教審の答申(「生きる力」「心の教育」)の問題性
* 「生きる力」の衰弱は、社会構造(教育制度)により生まれている。→制度改革を
* 「心の教育」は、学校が内面に踏み込む学校価値の強化 →家庭の重視、学校の相対化
- 2) 「選択・責任・連帯の教育改革」~財団法人 社会経済生産性本部の提案
* 社会政策特別委員会(堤清二委員長)、専門委員会(橋爪、内田隆三、大澤真幸)
委員には、日教組・川上委員長、文部省・佐藤元次官、中教審や財界団体の委員など
* 改革の目標: 学校の機能回復(∵学校が教育機関として機能していない)
* 教師、家庭、生徒・学生の、主体性の回復 文部省(プロセス管理)は不要

□3□ 小・中学校の改革

- 1) 学区制の廃止
* 小学校、中学校の学区を廃止し、親が学校を選択する 学校は、退学処分も可能に
学校間に競争が生まれ、教育努力が促進される 学校にいる「理由」を理解できる
* 混雑現象がおきたら? ①弾力的に対応(受け入れ) ②不人気校のテコ入れ・再生
- 2) 校長に学校経営権を
* 校長に、人事・予算・教育を含めた「学校経営権」を与える 権限/責任
校長以下の教師集団が、教育プランを掲げて名乗りをあげ、学校運営を請け負う
* 校長~教師の連帯 校長のプランに共鳴する教師が集まる 協力しないと職を失う
校長~家庭の連帯 校長のプランを理解する親が通学させる 校長の責任が明確に
* 教育のプロセスを管理(教育委員会、学習指導要領)→教育の結果(成果)を管理

- 3) 成績の相対評価をやめ、絶対評価に
* 教師~生徒の連帯 相対評価は、成績が他者との関係で決まる 相互敵視
絶対評価⇒到達度評価 学力を人格の評価と取り違えない 評価はほめること
* 学力は学力にすぎない 学力も多様である 学力以外にも多様な能力がある
- 4) クラス編成を自由に
* 固定人数制(40人)を廃止し、校長の裁量に 非常勤教師 小学校も教科担任制
- 5) 授業の改革、学校運営の改革
* 午前基礎科目を集中、午後は学校を地域に開放
* 不必要な会議、研究授業、事務書類を廃止する
- 6) 校長・教師に「異動の自由」を 辞職した校長・教師の「転職市場」が必要

□4□ 高等学校の改革

- 1) 校長に高校の経営権を (この項は、小中学校と同じ)
- 2) 高校の入学は原則として無試験に
* 高校全入状態(96%)で、入試は無意味 複数校を併願、書類審査で選考→入学許可
混雑現象が起こる? ①高検(後述)を導入すれば、学校格差は意味が薄くなる
②各人に複数校から許可が届くよう調整 ③提出書類(絶対評価の成績表、外部試験による到達度評価、学校外活動の記録、本人の手紙、その他)を工夫する
- 3) 高校の学力認定のため、統一の外部試験(高検)を
* 高校の空洞化(中退者増加、学力低下)進む 学校差が意味をもつ限り、入試は存続
* 高検(高校学力資格検定試験): 高卒資格(就職、受験)を認定する外部の統一テスト
基本教科に限り、内容もやさしくする 年6回程度は実施
- 4) 高校カリキュラムの自由化・多様化を
* 高校の授業は、高検準備のほかは、まったく多様で自由なものとなる
コース制、単位制、無学年制、職業教育、……

□5□ 大学の改革

- 1) 学生定員をなくし、入試を廃止する (卒業定員を重視)
* 入学者>卒業生 入学希望者を受け入れたあと、絞っていく(キックアウト制)
高校までの学習歴で絞る入試より、大学の専門の成績で絞るほうがずっと合理的
* 混雑現象? ①人気の学校は拡大すればよい ②進級試験の問題を公表すれば、無駄な
入学は減る(中退は評価されない) ③奨学金改革(後述)で志望が分散する
- 2) 学費制度を改革し、奨学金を充実させよう
* 育英会への集中から、各大学ごとに分散した銀行ローンに 全員に給付 条件に差
機会費用を負担する学生は全員、大学に在籍できる 親の負担軽減(機会の平等)
よい奨学金にはよい成績が必要なので、勉学の動機が強まる
奨学金の種類がスクリーニング機能を果たす→学校差の解消へ
- 3) 研究開国(大学の流動性、機動性を高めよう)
* 教員の任期制、公募制(海外からの応募を含む)、ポスドクの充実、兼業自由化
* 研究費の多元化(科研費中心→分散化)、使途の自由化
* 国立大学の整理統合 私学/国公立のハンディをなくして競争を 大学設置自由化

青少年の心と現代の社会



□0□ 講師自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学助教授(社会学)。1996年4月より、大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授。
著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(講談社)、『崔健』『性愛論』(岩波書店)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』『橋爪大三郎の社会学講義2』(夏目書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』『J-718思想講座 正義・戦争・国家論』(共著、径書房)、『近代国家とオウム』(共著、南風社)、『科学技術は地球を救えるか』『研究開国』(共編著、富士通経営研修所)、『新生日本』(共著、学習研究社)、『こんなに困った北朝鮮』(マガジ・近刊)ほか

□1□ 神戸小学生殺傷事件(酒鬼薔薇聖斗)の衝撃

- 少年Aは、ふつうの少年か、それとも精神異常者か 行動=環境×内因
 - 野田正彰氏~環境を重視 祖母の死、透明なボク、義務教育への復讐、マイク型犯罪
 - 小田晋氏~内因を重視 快楽殺人=異常者、稀だが一定割合で発生、動機=性欲
- 『文藝春秋』が、少年Aの供述調書を公表 快楽殺人を裏付ける記述が多い
 - 少年Aを医療少年院に送致したのは、適当か? Cf. 羽田高事件: 犯人は社会復帰少年A自身は、稀な異常者。だが、多くの少年が彼に共感できると感じたのはなぜ?

□2□ 黒磯北中女教師刺殺事件(ナイフ少年)の衝撃

- ふつうの少年がナイフを持ち歩き、ささいな原因で衝動的に教師や同級生を刺す
 - ナイフ、エアガンをかなりの比率の中学生が所持
 - 5~6年前から、目立たない、弱いタイプの少年が「護身用」に所持するのが流行
- 少年はなぜ“キレた”のか?
 - 授業に遅刻したのを教師に廊下で5分ほど注意された→脅かしてやろうとナイフを出した→教師はナイフを見てもひるまなかった→カッとめてめった刺した
 - 自分を抑えることができない ナイフを使ったことがない 急所を外せない

□3□ ふつうの少女たちが、なぜ“キレる”のか?

- 学校拘禁症候群: 嫌な場所に閉じ込められたための、異常な反応のかずかず
 - 学校にいる理由がわからない(勉強動機の喪失) 皆が行くから行くだけの場所
 - ×教師の管理 ×親の説教 教育が普及したので、努力のわりに報われない
 - 学校内ストレス 学校にだけで、自我が抑圧され、心理的に不安定に
 - 保健室登校 →登校拒否(不登校) →いじめ →ナイフ少年 ……
- 生理的反応によってしか、自分と外界との関係をとらえられない少女の急増
 - ムカつく(生理絶対主義)、ジコチュー(自己中心主義)、キレる(統制がなくなる)
 - 自己調整能力、コミュニケーション能力の欠如 「躰け」(幼児家庭教育)の失敗 小学校低学年から、私語、ふらつき、多動、注意散漫などの現象が顕著に

- 「ふつう」の(=自己表現の確立しない)の少女少女が、いちばん危険で怖い
 - 不良・非行(→補導)→校内暴力(→管理強化)→いじめ(→ソフト管理)→キレる
 - 昔は、問題行動を起こす者は見当がついたが、最近は予測がつかなくなった
 - 自己表現が苦手な他者に認められず、自信がない→自尊心を傷つけられると急変する

□4□ 親たち、学校、社会はどうすればよい?

- 無連帯(アノミー)が、学校をめぐる問題の根本である 無連帯→規範の解体 Cf. 小室直樹 1979 『危機の構造』ダイヤモンド社 →中公文庫
 - 教師の無連帯 校長vs日教組 教室は治外法権 超過勤務・3K職場 教師の社会的地位・威信は急降下→校則(統制のための恣意的な規則)が膨張
 - 生徒の無連帯 成績は個人ごと(個人救済)/学校は擬似共同体 ~矛盾 いじめ: 擬似共同体が個人を攻撃する“祝祭” 個性より共同体帰属が優先
 - 地域社会の無連帯 家庭が学校の価値に従属(勉強しなさい、先生躰けて下さい) 子供文化(ガキ大将)の消滅 近隣集団の解体 家族~○私利利害×公共性
- 教育改革: 連帯の回復→少女少女たちが大人に成長するための、健全な環境を
 - 生徒と教師との不幸な出会い ⇨ 学区制廃止、校長に人事権・経営権を!
 - 校長が教師を任用→校長と教師は運命共同体→教育効果を追求するプロ集団に変身
 - 高校入試を廃止(中高一貫化)して、高校学力検定試験(高検)を導入すべき!
 - 内申書廃止(教師は生徒の内面に踏み込んではいけない)
 - 成績の外部標準を導入すれば、生徒と教師は連帯できる
 - 相対評価をやめ、絶対評価に
 - 学力別クラス編成 個人カリキュラム 生徒が学校に合わせる→学校が生徒に合わせる
- 家庭教育の再建: 自己責任原則を確立しよう
 - 「自分で選択したことには、責任を負う」ことを、教育(人格形成)の基本に
 - 大学学費は、親が払わず本人が負担する 奨学金(教育ローン)を学生本人が返済 学生が大学の経費を全額支払うことにすれば、大学入試は全廃できる
 - 親子両世代に、数兆円の可処分所得が生まれる: 赤字国債より有益な将来への投資
- 社会に貢献し、公共のために働くことの誇りを育てよう
 - 自由と規則は両立する(規則~義務なしに、自由~権利はない)ことを学ぶ
 - 例) あるインターナショナルスクールの校則は、3つしかない
 - 1) Respect the rights and property of others. ×学校の規則を守ります
 - 2) Never keep someone else from learning. ×私は勉強します
 - 3) Never say or write anything to hurt someone. ×思いやりの心を持ちます
 - 自分の喜びのために文化を学び、自分を知るために歴史を学ぶ ×知識 Cf. 加藤典洋 1997 『敗戦後論』: 日本の国民(ネーション)=歴史の主体を作り出そう
 - 文化の再発見 高度成長とバブル時代は終わり 少女少女は大人世界の鏡 自分を語る言葉を持つこと →他との比較でない、絶対の規準をもつこと 言葉によって自分をコントロールし、現実社会を構築すること

有権者の自覚・一票の重みを問う

橋爪大三郎（東工大）

□4□ 大日本帝国とは何だったか

- 1) ひとくちに戦前と言っても、統治形態は何回も変化した。
律令制（天皇＋藩政） → 専制政治 → 内閣制 → 立憲君主制（大日本帝国）
1868 1869版籍奉還 1871廃藩置県 1885 1889 1925普通選挙
- 2) 天皇と臣民
「臣」：男性の奴隷 cf 妾 「民」：自由民 支配者（君＋臣）／被支配者（民）
「臣民」：大日本帝国の人民をよぶ“造語” 支配者（天皇）／被支配者（臣民）
- 3) 神道は宗教にあらず
天皇はなぜ大日本帝国の主権者か → 万世一系だから（天照大神の子孫である日本人の統治権を継承した） → それを確認する儀式が神道 → 「神道は宗教でない」として、仏教徒・キリスト教徒を含む日本人に神道を強制 → 靖国神社は国営
- 4) 統帥権
・統帥権は本来、軍令（作戦・指揮権）／軍政（行政）の分離を意味した
・旧憲法では、陸海軍が、政府・議会を経由せず天皇に直属することを意味した
⇒ 統帥権、および陸海軍大臣現役制を武器に、軍部が独走 ～ 旧憲法の欠陥
- 5) 旧憲法では、人民は、国家を相手に訴訟を起こせなかった 限定つき人権

□5□ 戦後民主主義とは何か

- 1) ポツダム宣言と、占領軍
・天皇の主権は、連合軍司令官に従属する (subject to)
・天皇の地位は、自由に表明される日本国民の意思によって決定される ～ 「国体」
- 2) 日本国憲法と日米安保条約
・憲法と同様、条約も、ある国の人民を拘束する 広義の憲法＝憲法＋慣習＋条約
・安保条約（日米軍事同盟）と自衛隊は、広義の憲法を形成している
・自衛隊：国際法上は軍隊、国内法的には軍隊でない（×国外での行動、×軍事法規）
・国連加盟の矛盾 国連憲章は国連軍の規定（参戦・貢献義務）あり cf 湾岸戦争
- 3) 歴史論争
・Q：大日本帝国の公務従事者（軍人）の行為は、日本国の人民が評価すべきものか？
戦後民主主義：侵略戦争だから犯罪 ↔ 保守主義：公務だったから価値あり
・靖国神社問題 日本国が、戦前の公務殉難者を悼む方法を持たない、という問題
- 4) 政治改革と日本の課題
・戦後日本＝40年体制（国家統制）＋55年体制（保守一党政権） ⇒ 政権交替なし
・政治改革＝官僚支配の打破＝国会の主導権の回復 × 政府提案 × 通達行政
・教育改革 画一教育（集団に同調）から個人教育（自己選択・自己責任）へ

参考

社会経済生産性本部・社会政策特別委員会

中間報告「選択・責任・連帯の教育改革——学校の機能回復をめざして」98年7月

（全文は、<http://www.valdes.litech.ac.jp/~hashizm> でみることができます。）

堤清二・橋爪大三郎『選択・責任・連帯の教育改革（仮題）』岩波ブックレット（99年1月）

性愛論 (1)

橋爪大三郎 (東工大)

□0□ 講師自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学助教授(社会学)。1996年4月より、大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授。
著書……『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション(全3巻)』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『崔健』『性愛論』(以上、岩波書店)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『大問題!』(幻冬舎)、『橋爪大三郎の社会学講義』『橋爪大三郎の社会学講義2』(夏目書房)、『科学技術は地球を救えるか』『研究開国』(共著、富士通経営研修所)、『オウムと近代国家』(共著、南風社)、『新生日本』(共著、学習研究社)、『正義・戦争・国家論』(共著、径書房)、『こんなに困った北朝鮮』(メトロ・近刊)ほか

□1□ 性愛とはなにか

- 1) 人間は、「身体」として存在している
性：人間が、身体～身体として、直接に関係する現象 生む/生まれる
・暴力～相手の身体を否定する(なくそうとする) 性愛～相手の身体を肯定する
- 2) 性別
・性別には、いくつかのレベルがある 身体的性別/心的性別/社会的性別
・心的性別にそくして、同性愛/異性愛が生じる
- 3) 性愛関係
・性愛関係=性愛を含む関係 婚姻：永続を前提とする、極大な性愛関係

□2□ 性愛倫理とはなにか

- 1) 性愛倫理：誰といつ、性愛行為を行なうべきかに関する判断
結婚は、倫理なしに成り立たない(∵状況が変化してからといって解消できない)
- 2) 恋愛に倫理は必要か
・結婚は排他的/恋愛は併存可能(それゆえ、恋愛のチャンスのほうが不平等)
・恋愛は、第三者に対する請求権がない(公的でない) →恋愛は結婚に移行する
- 3) 愛と性のパラドックス
結婚したら愛すべき→愛しているから結婚すべき→愛しているからセックスすべき→セックスしなければセックスすべき(では、愛はどうやって確かめる?)

□3□ テレクラ、ブルセラ、援助交際

- 1) 売春は悪か
・売春：不特定の人と、対価を受けて性愛行為をなすこと 市場～相手を断れない
・売春は、家族の価値観と逆立する →貧困でないと、売春はしない →対価が高まる
・売春は、家族の価値観と逆立する、性病が伝染する、不本意な強制である、などの理由で悪とされる。しかし、売春そのものを悪だと論証した者はいない。
- 2) テレクラ
・不特定の人と出会うチャンス だが、出会うとそれは特定の相手になる(断れる)
cf ブルセラ……身体でないもの売る～売春ではない だがなぜそんなことをする
- 3) 援助交際
・対価を受けたとしても、相手は不特定でない(恋愛類似行為)

性愛論 (2)

橋爪大三郎 (東工大)

□4□ 自己決定権は万能か

- 1) 中絶 胎児は法律上、物(身体の一部)と人間との中間 宗教上は魂をもつ人間?
・日本：結婚して出産>中絶>未婚の母 スウェーデン・米：結婚して出産>未婚の母>中絶
・自己決定権を重視し中絶の自由を認めるのは、欧米では革新的 →医師への攻撃
- 2) 代理母 自分の子供を産む自由 →産みたくても産めないなら、代理母を
・産みの母(代理母)には権利はないのか 契約の自由 vs 道徳・感情
- 3) 遺伝子診断 自分の遺伝的情報を知る権利/他人に知られない権利
・しかし、体細胞のかけらがあれば、遺伝子診断(DNA鑑定)は誰にでもできる
・結婚相手の選択に、遺伝子診断が使われることの危険と、副作用
- 4) 未婚の母(ドナーによる妊娠)
・精子銀行 不妊治療(AIH, AID)のための精子の保存機関
・精子を利用する権利は誰にある? 妻/死別した妻/愛人/無関係の人
・他人の精子を使って母となるのは女性の権利か、子供の権利の侵害か

□5□ 男女は対等なパートナーか

- 1) 家事とはなにか 家事：家族が共同で生活するためにしなければならない活動
・家事は、近代家族とともに始まった 日本人男性は家事を分担しない cf中国人
・女性が家事を分担すると、共働き女性に負担が集中→ 専業主婦/キャリアシガルに分解
- 2) 育児とはなにか 育児：新生児が成人するまでに家族のなかで必要となる活動
・育児が必要なのは高等猿類(母子関係)→オスが保護→メスは常時セックス可能
・女性が出産し、子育てを行なう 母親/父親 フロイト説 甘え説 親は友達か?
- 3) 家庭とはなにか Df 夫婦と子供を中核とする共同生活の単位
・家族の共同生活は、手段である以上に、目的である 男女の共同責任→家事分担
・家族と学校・企業は、時間を分割して両立 企業は残業・献身を強要すべからず

□6□ 性愛に未来はあるか

- 1) 結婚外性愛(不倫) 結婚だけが性愛を独占することは不可能に cf赤線
・『失楽園』ブーム 専業主婦の地位低下+不満 →心中(その外側に未来なし)
・熟年離婚、家庭内離婚の増加 独身率の上昇 結婚願望の冷え込み
- 2) 高齢者の性愛
・少子化、高齢化 →生きていることを確認するものとしての性愛
- 3) 性的少数者の性愛 ゲイ・レズ・性的同一性障害/サィズム・マルズム・パドフィリア…
・マイノリティー文化 サブカルチャー(何でもありの相対主義)
⇒性愛に常識・定型を求めることはますます困難に 個人の選択と自己責任の時代

参考

社会経済生産性本部・社会政策特別委員会
中間報告「選択・責任・連帯の教育改革——学校の機能回復をめざして」98年7月

上記の全文は、<http://www.valdes.titech.ac.jp/~hashizm> でみることができます。

□1□ 98年危機:日本は持ちこたえるのか

- 1) 金融危機——日本株式会社の崩壊
80年代末～90年代初のバブル経済
土地神話 過剰流動性 株式の相互持合い→配当が低くても問題なし
日本の経済停滞 ⇨ 超低金利 ⇨ アジア投資、アメリカ国債投資(アメリカ好況)
アジア金融危機 ⇨ 日本の金融危機 ⇨ アメリカの失速、世界同時不況?
大蔵省の分割、銀行倒産、企業グループ再編、中央省庁の権限縮小
- 2) 政治の危機——迷走する連合政権
五五年体制 → 細川連立政権(反自民) → 「自社さ」連立政権(反新進)
選挙民の意思を問わないままの、政権交替・迷走劇
橋本政権 参議院選挙(98.7)で敗北(高投票率) 景気低迷を国民が批判
→小淵政権 竹下(自民党主流) / 民主党(菅直人) 過渡的な協力関係
- 3) [結論] 戦後日本を安定させていた条件(国際関係、経済構造、……)が消失しつつある ⇨ 危機

□2□ 戦後日本の構造的矛盾

- 1) 安全保障
日本国憲法(第9条 戦争放棄) ~平和憲法
日米安全保障条約 ~日米軍事同盟 自衛隊
国連加盟 ~国連憲章・国連軍
新ガイドライン 対中国牽制?
TMD(戦域防衛構想?) テポドン・ミサイル
- 2) 不徹底な民主主義
地方分権は形ばかり 地方交付税 3割自治 補助金 通達行政
地域社会の解体 自治能力の喪失 教育の荒廃

□3□ アジア太平洋時代を迎える日本

- 1) 多様で不安定なアジア
* 短期的な要因 不安定な政治問題(北朝鮮、台湾、中国共産党、……)
* 長期的な要因 この地域に、共通の文明的基盤がないこと ×儒教、×仏教
東アジア経済の台頭
改革開放以後の中国 2020年のGNP はアメリカに匹敵 世界の重心はアジアへ
- 2) ナショナリズム:進まぬ国際化
歴史論争 教科書問題 従軍慰安婦問題 南京大虐殺
放置されたままの戦争責任問題
戦後世代の誤解:当事者でない≠責任がない⇨「大日本帝国」に対して責任とれず
21世紀を展望する、前向きのプランなし
- 3) アジアの時代に、日本は用意ができていない
* 欧米的価値(民主主義)にも、アジアの伝統にもコミットしていない
* 大東亜共栄圏(～45) → 小日本繁栄圏(～95) → 全世界共存共栄戦略の構想を

□1□ 方向を見失う思想界

- 1) 1970～1980:新左翼の高潮と退潮
スターリン批判→社会党・共産党と違った革命勢力(団塊の世代)→過激派三大事件(よど号ハイジャック、三菱重工爆破、連合赤軍リンチ殺人)→環境・やさしさ
- 2) 1980～1990:ポストモダン～ニューアカデミズム～ニューサイエンス
脱マルクス主義～フランス・ポスト構造主義→価値相対主義×スノビズム→高度消費社会(日本が一番という思い上がり)→面白ければ何でもありの相対主義全盛
- 3) 1990～ :左翼の退潮/ニュー保守主義の台頭
湾岸戦争(ニューアカの左翼がえり)→冷戦・バブル崩壊→オウム事件(オタク世代の大あわて)

□2□ 戦後日本の価値観が崩壊する

- 1) 平和憲法絶対主義?? ⇨憲法改正論の台頭
・憲法9条と日米安保条約の矛盾
・町田康、花村萬月、福井晴敏といった若い作家たちの暴力描写
- 2) 日本株式会社?? ⇨国内投資の冷え込み
・年功序列・終身雇用 →中高年リストラ・年俸制・年金破綻 フリーター志向
・霞が関神話の崩壊 大蔵省の解体、中央官庁の分割・合理化
戦前:国家=教会
戦後:国家が世俗化したので、企業を聖なる献身の対象とした
- 3) 家庭??
・独身率の上昇 家庭内離婚 家庭にセックスは持ち込まない
・専業主婦の価値低下 ⇨ テレクラ・不倫ブーム 『失楽園』
・援助交際 「他人に迷惑をかけなければよい」教育の帰結
- 4) 科学??
・オウム真理教事件 受験とファミコンで育った世代の、理想世界の反社会性

□3□ 古いモラルの喪失と、新しい価値観の未成立

- 1) ブルセラ論争 (ブルセラ=ブルマー、セーラー服ショップ)
・戦後市民派:ブルセラ現象(一般女子中高生による性の商品化)は、逸脱事例
・ポスト戦後派(宮台真司ほか):家庭が規範を強調するほど、ブルセラ現象は加速
- 2) 名前のない世代
・紛無派→新人類→コンビニ世代?(ファミコン世代?) →
ギャル →小ギャル →孫ギャル
伝統的な「状況倫理」に代わる、新しい行動様式が現れるにはもう少し時間が必要?
- 3) 歴史に立ちかえること
・藤岡信勝～自由主義史観 「自虐史観」に反対 「新しい歴史教科書を作る会」
・加藤典洋 1997 『敗戦後論』講談社 →歴史主体論争